

～被災地支援レポート～

大船渡市にて支援活動を行う

J Aあきた白神では能代市からの要請を受け、4月2日から6日までの5日間、被災地支援のために職員を派遣いたしました。被災地へ赴いて支援を行った二人の職員に、被災地の様子や支援の状況について聞きました。



金融共済事業本部
共済課

桂田 ^{たけひこ} 健彦

出発して大船渡市庁舎へ到着する道中でも、地震の被害はまったくない感じでした。そのまま支援物資を仕分けするため、立根小学校体育館へ向かいました。仕事現場だけをみれば被災を関係なく感じますし、体育館を出て周りの民家を見れば、普通に生活をしているように見えます。しかし被災地を確認しに行くと、物資班全員が言葉にならない衝撃を受けました。テレビや新聞、写真では絶対に伝わらない悲惨な現状を見て、津波の恐ろしさを痛感しました。自衛隊車両

両が行き交うなか、大船渡漁港付近を走行しても周りはガレキの山。鉄筋の建物が残っているものの、2階には大きな丸太が刺さっていたり、大きな漁船が街中いたるところに転がっていて、異様な光景です。どうすればこのようになるのか、想像できません。物資を仕分ける際、全国から来ているボランティアの方と話しました。職場を津波で失った人、同級生が津波で亡くなった高校生、実家が心配で帰省してきた人、また地元の中学生たち。自分にとっては縁もゆかりも無い街でも、色々な人が復興を願い、色々な想いでボランティア活動をしているのだと痛感しました。今回の支援活動をする際、少しでも現地の役に立てればと思っておりましたが、元気な小・中学生を見て、逆にこちらが元気になりました。地元中学生が発行している学校新聞を見て、自分たちが被災しているにも関わらず、交流ある中学校や地域住民を心配したりするなど、これから先の大船渡市の『希望』が見えてきた気がしました。



営農経済事業本部
能代営農センター

鈴木 ^{りょうすけ} 良介

『私たちは一人ではない。一人がみんなのために何かをしてこそ、今の状況を良くしていくことが出来るのだ』と私は学びました。大船渡市の立根小学校にて、全国から来ているボランティアの方々と一緒に、物資の仕分け作業を行いました。大船渡市の光景は思っていたよりも悲惨で、驚きを隠せませんでした。それ以上にボランティアに来ていた中高生・一般の方々の明るさに驚かされました。「状況は皆同じ、今私に出来ることや役に立てることを精一杯頑張りたい」と

話す人たちと一緒に作業し、私もすごく元気づけられました。辛い時こそ、みんなで協力し合うことが必要。改めてその大切さを学びました。それは仕事も同じだと思いますので、今回体験したこと、感じたことを今後の仕事に活かしていきたいと思います。